「母の匂い」

松原花　（30 代）

「母親」という生き物は、慈愛に満ちていると思っていた。

それは「お母さんは洗濯石鹸みたいな匂いがする」というような歌を聴き、優しい匂いを想像したからだろう。あるいは「雨降りの日は、お母さんが傘を持ってお迎え」というような歌を聴き、いつも見守ってくれる存在を思い描いていたからかもしれない。

物心ついた時から父子家庭の私は、歌や本から母親を知るしかなかった。おかげで、頭の中にはそれはもう立派な聖母が出来上がっていた。後光だけでは飽き足らず、背後には天使まで飛んでいる。そんな聖母マリアのような母親ばかり想像していたのだ。

さて、そこから長い年月が流れ、私はとうとう母親になった。

私という母親から、洗濯石鹸の匂いはしない。

洗濯機がボタン一つで乾燥まで終わらせる時代だ。もはや、洗剤に触れることすらない。代わりと言っては何だが、コロナ禍から習慣になった手指消毒エタノールの匂いならするかもしれない。

私という母親は、雨降りでも子どもを学校まで迎えに行かない。

そのための置き傘だろう。置き傘がない場合は、悪いが全力ダッシュで帰ってきてくれ。共働きフルタイムの母親にとって、雨よりも明日の食い扶持の方が優先されるのだ。

私という母親は、平日の朝はもっと酷い。

「早くご飯食べて！」「食べた人から歯を磨いて！」「今日は体操服の日だよ！」

とにかく叫ぶのが仕事だ。しかし努力虚しく、子どもたちはボーッとテレビを見ながら朝ごはんを食べ、家を出る直前になって渡しそびれていたプリントを出してきたりする。下手すれば「今日牛乳パックがいる」とか言い出す。そして私は「何で今言うの！」とまた叫ぶ。

そのうえ、この母親は酒癖が悪い。

酒が入ると「大好きだよ〜」と言いながら子どもから離れなくなる。そのまま感動ドラマなど見た日には、泣きながら抱きついて離さない。子どもは、そんな母を「すこしうっとうしい」と思っているらしい。

挙句の果てに、この母親は折り紙やあやとりなど一切できない。

子どもの連絡帳に『折り鶴を三羽作る（分からない人は親に教えてもらう)』と書いてあった日には、震え上がった。私が教えるどころか子どもに教えてもらう始末だ。

結局、想像とはかけ離れた、ズボラで大雑把で平日の朝だけやたら口うるさい母親になってしまった。

それでも子どもは、そんな私を抱きしめてくれる。

「ママの匂いがする」

そう言って、洗濯石鹸の匂いのしない私に顔をうずめる。

子どものおかげで、私は本当の母親を知った。